

## 活動状況報告書（2月分）

文化芸術コース 荒川 真央

2月はレーガー作曲、ピアノソロ(テレマンの主題による変奏曲)、クラリネットソナタ、連弾作品を深く学ぶことが自身の課題でしたが、今月はレッスンや共演者とのアンサンブル、そしてレーガーの作品を通して“感性”について考えさせられた月となりました。

日本では未だ知名度も低く、演奏される機会の少ないM.レーガーの作品は、実際弾き手・聴き手ともに(あまりの音数に)難解さを感じる作風であり、私自身彼の作品をうまく享受できず退屈に感じるときがあります。目まぐるしく変わる調性にリズム、どこが旋律か解らず、2月に催されたコンサートで演奏された作品も奏者の音色は素晴らしくとも、私個人としては睡魔に襲われ彼は何故こんな作品を作曲したのだろうと考えずにはいられないものでした。しかし、そのコンサートでは(或いはどのようなコンサートでもドイツでは常に)会場には拍手喝采と感嘆の声が響き、今回初めて、音楽を生業としていないドイツ人の友人や来聴者に感想を伺ったところ「Komisch(奇妙・変な・滑稽)なところが良い」

「作風は難しいけれどその難解さが面白い」とそれぞれの意見を教えてくださいました。またともにクラリネット・ソナタを勉強している24歳の学生から「レーガーの作品はどれも音が多く、すべてを把握し整理するためには多くの時間が必要だけれど、とてもMusikalisch(音楽的)でどれも素敵」という言葉を聞いたとき、残念ながらレーガーの作品以前にクラシック音楽を「つまらない」と表現する日本人の多さ、義務教育に『音楽科』は必要か?と議論する国民性とを比較すると、ヨーロッパでは幼少期から誰もがごく自然にクラシック音楽に触れ、それらをつまらないものかつまるものか、必要か否かを考える余地はなく、音楽に対する感性や知識は自然に生まれ、根本的な経験値が大きく異なるのだと感じざるを得ませんでした。

しかしそれは一見越えられない壁のようにも思えますが、将来、北海道のクラシック音楽文化が更に発展することを願っている私にとって、“奏者の育成”と“聴く側の耳を育てる”ことの重要性、どちらにとっても有名な作曲家が作曲した有名な作品を題材とするだけではなく、“未知の音楽=つまらないもの”への抵抗が生れる前に多種多様な音楽に触れる機会を多く作っていくことが出来れば、更に多くの世界に通用する人材を生み出す礎となるのではないかと考えることができます。

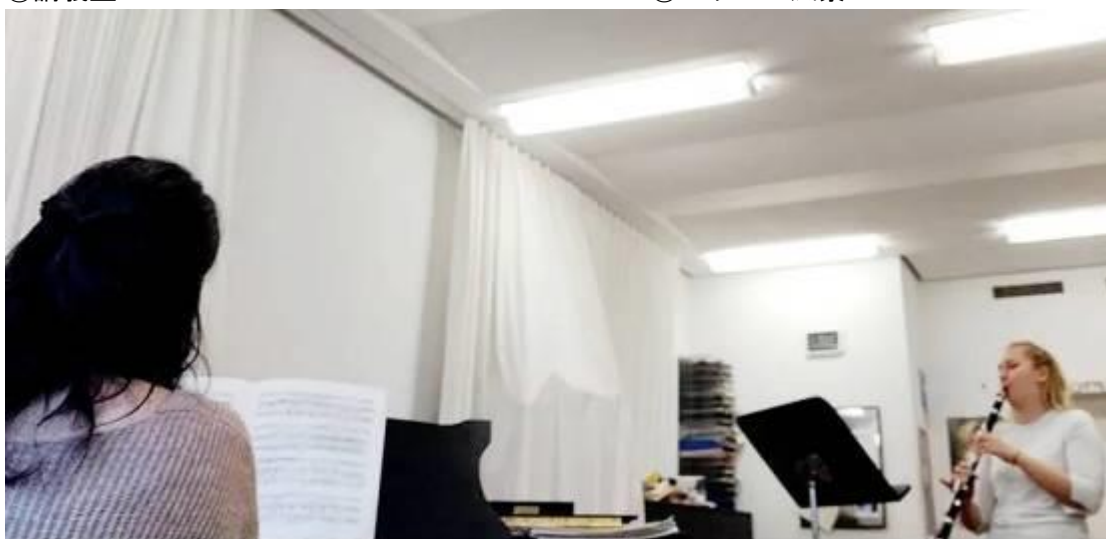
また2月は学生にとっての春休みが始まり、先生方は一様に「休息が大切」と学生に伝えていました。ドイツでのこの半年間、学生たちの音楽に向かう姿勢を鑑みると、確かに「休息も大切」と伝えたいくなるほど学生は根詰めて毎日を生活していました。私は日本での大学生生活4年間、そして卒業してから今日ドイツに来るまで“休息”について深く考えたことがありませんでしたが、自分もようやく大人になれたのか、今月は、“感性”についてと“休息”の大切さ、自分の指導者としての考え方の成長を感じた月となりました。



①講義室



②レッスン風景



③練習風景



④練習風景



⑤ ルードヴィヒスブルク城



⑥ ルードヴィヒスブルク城



⑦ ストライキ (U-Bahn 地下鉄) 風景